慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	恐嚇政治とロベスピエル
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.4 (1921. 4) ,p.528(60)- 550(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19210401-0060
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

恐嚇政治とロベスピエル

占部百太郎

一

佛蘭西大革命と云へば、直ちに恐怖時代を聯想し、斷頭臺（ギロツチイヌ）を聯想し、暴民政治を聯想し、無神論及び共產主義を聯想して、佛國大革命とは恰も無信仰、無秩序、混亂、兇暴、殺戮、掠奪、剽盜、等凡ゆる不穩なる文字と同意義に看做す者、今日尙ほ少なからず見受くるのである。これは畢竟此の世界歷史上の最大事件否、其の最も顯著なる運動に對する研究、考察の不充分であつた時代の歷史家や著書や、一知半解の知識に依て書かれた敎科書などの罪が、與つて多きに居ると思ふ。所謂『恐嚇政治』の行はれたことは、佛國革命（註一）に偶發したる不幸なる謂はば間違であつて、決して眞の革命と混同す可きでない。佛國革命の本體と云はうか眞相と云はうか、即ち眞の佛國革命其者は、斯かる兇暴にして醜惡なる附隨的偶發的事件の爲に、縱し幾分の汚名を蒙つたとするも、決して其の本來の目的や精神までも沒却せらる可き理由はないのである。

佛國革命が此の如く常軌を逸して、極端過激の徑路に馳せたのは、佛國人の尊大なる衝動的なる國民性が多少禍を爲して居るけれど、若しルイ第拾六世及び王妃マリイ・アントアネットにして、猥りに諸帝王の兵力を借りて革命黨の鎭壓を企てたり、脫走貴族の後を追ふて逃亡を圖つたりしなかつたならば、此の革命は一七九一年の憲法實施と共に、多分芽出度終結を告げたであらう。ところが佛國王王妃及び王黨の輕擧盲動に加ふるに、歐洲諸帝王の革命に對する反感さへあるに、血氣に逸つて事を好む立法議會の躁急なる開戰論は、竟に佛國革命をして夫の如く軌道を脫せしめ、結局革命の眞使命其者にまで汚點を加へたのである。

何れにもせよ、佛國革命の使命は公明である、正大である。決して兇暴且つ醜惡なる事件と混同せらる可き不純なる分子を包含せぬのである。佛國革命の大目的と眞精神とに就ては、余は既に本誌第十四卷第八號に論じたから、茲にこれを繰返すことを避けたい。要するに、世間の佛國革命を論ずる者、恐怖時代の慘劇を見て、直ちに過激共和黨の罪惡を斷ずるけれど、此の如き慘劇を惹起したるは、上述の

諸原因が錯綜して居るのであるから、其の眞相を充分に了解しやうと思へば、吾人は所謂『恐嚇政治家』(Terrorists)の立場からも之を觀察する必要がある。マッシュー教授も、「彼等(過激革命黨)は秩序を求めて、決して無政府を蔓ひし人々には非ず」と曰つて居る。彼等の確信したる所に據れば、革命に反對するは、其罪死に相當する、佛國が此の無政府に加ふるに、外寇の危急から免れんとするには、須らく大にギヨッチイネを働かして、速に國内に於ける凡ゆる反對黨を芟除し盡すの外はないと。餘り極端な例ではあるが、泥棒にも三分の道理があると云ふではないか。況や佛國革命時代のステーツマンを以て任じた所謂『恐嚇政治家』に於てをや。余は左に、佛國革命時代恐嚇政治の眞相に就て述べやうと思ふ。

二

ロベスピエル等の過激革命黨が、其の恐嚇政治(Terrorism)を行ふ爲に用ひた機關には、公安委員會とか革命裁判所とか、『派遣代議士』(Representatives on mission)とか(註二)巴里革命自治團とか、國民衛兵とか、其他サン・キュロット(註三)などと稱せられた暴民團に至るまで、種々在つたけれど、巨魁ロベスピエルが最後まで根據地として居た牙城は實にジャコベン倶樂部であつた。ジャコベンと云ふ言葉が、是れ亦直ちに佛國革命の兇暴なる方面を、聯想せしめ、人をして慄然たらしむるものがあるけれど、事實は決して最初からそんな危險な團體の倶樂部ではなかつたのである。ジャコベン倶樂部の前身はレンス出身の法律家連の首唱から成立つたブリトン倶樂部(レンスはブリタニーに在り)である。此倶樂部には、後ミラボー、アッベ・シエース、バルナーヴ等が加入して、部員たる者は公民權を有したブウルジョア階級に限られた。而して國民議會に提出せらるる可き議案は、豫め此の倶樂部で研究調査を積まれた。ブリトン倶樂部は國民議會が、ヴェルサイユから巴里に議場を移轉した後サン・オノレと呼ぶジャコベン修道院を會場に充てたので、ジャコベン倶樂部の稱が起つたのである。此の如く、最初此の倶樂部は、各政派に亘つた寧ろ中等階級代表者の團體たる傾向があつたけれど、前述の如く佛國内外の形勢が漸次危局に趣くに連れ、過激共和論益々勝利を占めて、先づシェース等の立憲穩和派が去り、次ぎにミラボーが去り、結局ロベスピエルが惟り全權を揮ふに至つて、此の倶樂部は佛

國の政界に、宛かも嶋を負ふ虎の如き地位を占めたのである。

ジャコベン倶樂部の重もなる政治家から成立つた國民協議會(Convention nationale)中の所謂『山岳黨』(montagnard)の團體が、當時は勿論、今日に於ても、一部の人から夫の如く蛇蝎視せらるる理由の一は、最初はジャコベン倶樂部に屬し、後に一派を組織して其の敵黨となつた政治家の集團たるジロンド黨(穩和共和黨)との比較對照からである。ジロンド黨は其の政綱が佛國の國狀に適合しなかつたが爲と、其の主張が兎角不徹底であつた爲と、其の政治的實力が劣弱であつた爲、結局ジャコベン黨の手に仆滅さるるの悲運に會した。然しジロンド黨が滅亡するには、滅亡するだけの當然の理由が在る。決してジャコベン黨の獰猛にして兇惡なるが爲ばかりではない。然も弱者に同情するは普通の人情である。カーライルを始め、拾九世紀の歷史家は何れも事の眞相を究めずして、一向に弱者たるジロンド黨に同情の筆を揮つたが爲、ジャコベン黨殊に其の代表者たるロベスピエルは殆ど殺人鬼の如く憎惡せらるるに至つたのである。殊に此の傾向を甚だしからしめたのは、ラマルティンの『ジロンド黨名士史』(Histoire des Girondins)である。彼は人も知る二月革命の大立者である。彼は其の政治家情熱の筆を以て、プルタルクの英雄傳に依て修養し希臘羅馬古英雄を景仰して居たローラン夫人を始め、ヴェルニオー、ビューゾー、ゴウデー、ルーヴェ等を賞揚して措かなかつた。有體に云へば、ラマルティン自身が曾に是等ジロンド黨名士に私淑して居たのみならず、二月革命には當年のジロンド黨と略々同一の態度を採つて居るのである。彼の『ジロンド黨名士史』の歷史としての眞價は推して知る可きである。

三

前にも一寸述べたやうに、佛國革命は其實ルイ第十六世が嚴肅に其の實施を宣誓した一七九一年の憲法發布と共に終結を告げた筈である。然るに其れがさうでなくして、革命が再度破裂して(余は敢て再度の破裂と云ふ)彼の如き歐洲の大禍亂を誘致したのは、諸帝王や舊文化の反抗の故もあつたけれど、佛國王室、主として王妃マリイの陰謀と、輕躁事を好む立法議會の革命派の對外宣戰である。既に自由、平等、博愛の民主々義を標榜して起つた佛國革命が歐洲の舊文化、舊制度に向て挑戰したからには、黑白の勝敗決する迄、假令、幾十年に亘つても戰爭の繼續せらる

可きは、理の視易き所である。何となれば、其は一時の利害、感情の衝突ではなくして、國家並びに社會が據つて以て立つ根本の基礎の爭鬪であるからである。此の如くして佛國は隻手を以て、歐羅巴十數國を對手として戰はねばならぬ境涯に陷つた。併かも此の國家の安危存亡の大危機に際して、王黨及び貴族僧侶の叛亂は各地に頻發した。殊にリオン、ツーロン、ボルドー各大都市の叛亂、ラ。ヴァンデ地方農民の一揆は最も革命政府を手古摺らした。既に不信極まる國王王妃を戴ける のみならず、內には反革命派の叛亂蜂起し、外からは潮の如き大軍が國の各境域から侵入せんとしつつある。元來衝動的で激昂し易き佛國人たる者、狂熱せざらんと欲するも得べけんや。是に於てか、一七九一年の憲法も、一七九三年の憲法も、到底此の大動亂大革命の佛國を律す可く、何の用をも爲すものでない。乃ち國王、王妃を始め、苟くも革命に反對する分子は悉皆掃蕩せられたのである。ジロンド黨は其の手に對歐宣戰を發布しながら、其の善後策をも究めず、反つて革命と戰爭の進行乃至終極を妨害したから、フィーニックスと云ふ鳥のやうに、自分の火で自分も燒死したのである。既に平時の憲法が役立たないかぎりは、斯かる非常の際に處す可き臨時應急の法律制度が必要である。即ち國民協議會の首腦なるロベスピエルとダントンが、公安委員會や革命裁判所や其他軍國の急要に應ず可き諸種の機關を制定したる所以である。元來、人權を尊重し自由を熱愛する佛國人は、此の如き生殺與奪の絕大權を少數の人々に委任することは、其の最も好まざる所であつたけれど、國家の危急に際して、是非なく公安委員會に對して、單に一ヶ月を限て獨裁權を委託した。ところが政局及び戰局の進展に連れて、其の期限は延長に次ぐに繼續を以てし、竟に三年の久しきに亘つたのである。

ロベルピエル並びに彼が代表した恐嚇政治の何物たるかを了解しやうと思へば、先づ是等革命政府の諸機關の組織を考察せねばならぬ。

四

既に國王を弑して共和政治を宣布した國民協議會は、內外の敵に當る可く、強固なる中央政府の確立を必要とした。乃ち國民協議會は、當時ロベスピエルと殆ど一心同體であつて、彼に比べて却て人望の熾んであつたダントンの主唱に依て『革命裁判所』(Revolutionary Tribune)を設置した。(一七九三年三月十日)。此の裁判所は

凡て國民協議會の任命したる陪審官、檢事及び二人の助手から組織せられた。而して此の裁判所は凡ての反革命的企圖、並びに佛蘭西共和國の自由、平等、統一、不可分、國家内外の安全を妨害し、又は王政の再興を企て、若くは佛國民の自由、平等、及び主權に取て有害なる何等の他の權威を設立せんとする凡ゆる陰謀を裁判する權能を與へられた。而かも其の判決は終審であつて、上告を許さざる極めて不法の制度であつた。そこで一議員は「是れ人をして法律の陰に隱れて無辜を殺害するを得せしむる制度である」と非難したが、ダントンは之に答へて、平時には無辜を殺害せんよりは、寧ろ有罪者を免じても顧はないけれど、國家の危急に際しては、罪ある者を免れしめんよりは、反つて無辜を殺すに如かずと喝破したのである。革命裁判所は設立の當初こそ能く其の職責を盡して、王黨も、非宣誓僧侶(革命に反對して新憲法に宣誓しなかつた僧侶)も、其他の反革命分子も爲に慴伏して、佛國の大危機に際して、能く國防の成功を保障した。ところが、後には過激革命黨に依て害用せられ、却て革命を墮落せしめた事は、世の普ねく知る通りである。

一七九三年四月六日に至て、『公安委員會』(Committee of the Public Safety)と稱する獨裁權を有つた一種の革命政府が國民協議會の議員から組織せられた。立法議會の時でも、又國民協議會になつてからも、『國防委員會』其他の名稱で稍々これに類した會議は組織せられたけれど、多く效果は擧がらなかつた。然るにニイルウィンデンの敗報傳へられて、國民協議會は益々驚駭し、遂に敏活にして手强き行動を執ることの出來る少數者の秘密委員會設立を痛切に感じたのである。マラーは「吾人は國王の專政を仆滅せんが爲、自由の專政を創設しなければならぬ」と叫んだ。國民協議會はそこで九人から成る(後十二人に增加せらる)秘密委員會を組織せしめた。此の委員會の任務は、「假行政府に委任せられたる行政事務の執行を監理し督屬する」ことであつたが、場合に依りては、假行政府の行動を停止する事も出來た。尙ほ國家危急の場合に際し、内外防備の方策を講じ、其の命令は猶豫なく、假行政府の方で執行せられねばならなかつたのである。假行政府と云ふのは、王政廢止の結果解體せられた『立法議會』と對立したる、從來國王を首腦として居た行政府の後を承けて設けられた臨時行政部のことである。國民協議會はモンテスキューの三權分立の主義に鑑みて、『執行委員』の名を避けたけれど、事實此の委員會は假裝し

たる責任内閣であつたのである。唯だこれが暴虐を未然に防遏せんが爲、國庫は全然其の支配外に置き（後には金額を限て、機密費を供與せられた）、又公然、委員長を任命しなかつた。是れぞ即ち公安委員會である。其の委員の殆ど全部が山岳黨中のオッポルチュニストに屬し、ダントンは事實上委員長であつた。國民協議會は唯だ一週一回、公安委員會の報告に接するだけであつて、却て反對に公安委員會の爲に頤使せられた。假行政府の如きは、殆ど權力の形骸を擁するのみで、各省長官は事實書記長に過ぎなかつた。

公安委員會は佛國革命反對者が呪詛の焦點となつたけれど、古往今來、凡そ此の如き驚天動地の大活動を演じた政府は、未だ曾て聞かざる所である。マデラン曰く、「是等の人々（委員）は數ケ月間、一種任意的なる監獄内に生活したのである。彼等は日々夜々文書を集輯し、文書と共に人肉を彙集し、嫌疑者を斷頭臺に送り、軍隊を敵彈に立たしめ、幾萬千の人をば、或者は監獄に、或者は勝利に處罰しつつ、而かも殆ど凡てを死に致し、一國民の筋力を回復し、其等國民の血管内に鮮血を漲ぎ、困憊したる國家の首腦と心臓とを改造した。時には疲勞に堪えず、身を褥上に投げて三時間の睡眠を貪ぼり、目覺めては再び起きて國務に鞅掌したのである」（註四）。

公安委員會の外、革命政府が利用した機關に今一個『保安委員會』（Committee of General Security）と稱する秘密委員會があつた。此の委員會は一七八九年以來存在したのであるが、國家の危急に趣くに從て、大に權力を增加して、警察を管理し、間諜の報告に接し、國事犯人或は同嫌疑者の逮捕を命じ、且つ裁判所で審問せらる可き人々の名簿調製に任じた。要するに、公安委員會の補助機關であつた。其他巴里の革命自治團及び、サン・キュロットから成る暴民團等が、如何に革命政治家の爲に、使嗾せられ、煽動せられて、佛國革命の騒亂を激成したかは、佛國史を繙く者の知るが如くである。

五

『恐怖時代』と云ふのは、一七九三年六月から翌一七九四年七月に至る約十四ケ月間、佛國革命運動が最高潮に達した時期の名稱である。ジャコベン黨が巴里自治團の援助を藉りてジロンド黨を仆滅したので、比較的地方に多くの同情者を有つで居た全國各地の同黨員は一齊にジャコベン政府反對の旗幟を掲げ、内亂はいよ

いよ益〻重大になつて來た。此の如き內亂の瀰蔓は、外敵をして大に勢を加へしめて、對佛聯合諸國は各方面から佛國に侵入して來た。殊に英國の參戰は海上の封鎖となつて、佛國に取ては由々しき打擊であつた。當時佛國內外危急の狀態は、中央政府の權力の一層强大ならんことを要求した。そこで一七九三年七月公安委員會の滿期改選と共に、從來穩和說を唱へて、ジロンド黨に同情を寄せて居たダントン一派は殆ど全く排斥せられて、ロベスピエル等の過激派が多く選出せられた。

新公安委員會即ち『大公安委員會』は國民協議會の決議に基き、假行政府、各省長官、各大將、並びに總ての憲法上の機關は公安委員會の監理の下に置かれ、而して公安委員會は一週間內に是等に關して國民協議會に報告す可し」と制定せられた。而して將校を事實上任免黜陟する權力をも掌握したのである。

大公安委員會の主義は極めて簡單である。一言以てこれを蔽へば『恐嚇政治』を以て佛國內外の敵を掃蕩することである。

吾人は玆に少しく『恐嚇』(Terror)と云ふ言葉の意義を說明するの要がある。革命政府は一七九二年八月十日の王政顚覆以後、一七八九年の主義を一時停止して、國家內外の敵を防禦せんが爲、必要に應じて臨時非常の方策を採るの已むを得ざるに至つた。即ち一七九三年八月の交、佛國が前述の如く內外の大危機に脅威せられたとき、最も痛切に此の非常方策の必要を感じたのである。恐嚇なる言葉が政治の一方法を示す可く使用せられたのは、實に此時からである。當時佛蘭西は外寇に加ふるに內亂を以てし、此の愛國的亢奮に搗てて加へて、更らに恐る可き飢饉の脅威を受けたのである。巴里人は此の飢饉を以て、內外に於ける敵人の所爲に出づと信じ、是等の敵は須らく恐嚇の手段を以て仆滅せざる可からずと絕叫した。巴里四十八區委員及びジャコベン黨の代表者は、九月五日國民協議會に向て、「立法者諸君よ、恐嚇を議事日程に加へよ」と建議した。是れが、此の言葉の始めて公けに使用せられた嚆矢である。

六

而して此の恐嚇政治の代表者と目す可きは、眞にロベスピエルであつた。

ところがロベスピエルと云ふ人は、本來惡魔のやうに血に渴した殘忍な人物ではなくして、寧ろ多情多恨の感情家であつた。彼が早年の頃裁判官となつて、始め

て死刑を宣告したとき、家に歸つて涕泣したと云ふ事は有名な逸話である。彼は決して最初から殘忍な性質の人でなかつたのみならず、共和政治の設立せらるる前後まで、佛國の王政に、未練を殘して居たのである。ミラボーが表面ブルボンの王政を攻擊しつつ、其實ルイ第拾六世の秘密顧問であつたことは、一般に知らるるところであるが、八月十日事件（ブルボン王室顚覆の騷動）の張本人たるダントンでも、惡德新聞記者の典型なるが如く、又殺人の權化なるが如く看られたマラーでも（註、五）國王を死刑に處した後に至るまで、尙ほ共和政治の公布を躊躇して、密かに外國から國王を迎立する運動をして居たのである。最初から眞個に佛國の共和政治を希望して居た者は、カミル・デムレン等の如き極少數に限られて居たのである。然るにも拘はらず、是等の革命政治家がとうとう夫の如き大慘劇を演ずるに至つたのは、矢張り劇藥も慣れると利目が薄くなるから分量を增さねばならなくなるのと同樣であつたのである。

ロベスピエルは風采甚だ揚らず、辯舌亦巧みでなかつた。然も彼は志操堅實にして、且責白に淡泊であつたが爲、人望極めて盛んで、竟に佛國政界の第一位を占むるに至つた。佛蘭西革命史研究の最大權威であるオーラール彼を評して「何人もロベスピエルに於てデモクラシーの敎導者を見たのである。彼が一七九一年四月普通選擧を要求したとき、始めて同胞と平等と云ふ眞實の感情からして、友誼的なる尊敬的なる語調を用ひて人民に演說するの模範を政治家に示したのである。勿論人民の辯護者は他にも有つたけれど、然も人民の德性に對して、生氣があつて且冷靜なる尊敬の意を表現したる者、彼の如きは見られなかつた。民主々義者コンドルセは、人民は敎育せられて、始めて善良になるものであると考へて居た。又民主々義者マラーは人民を以て淺薄なるものであると考へて、唯だ子供の如くこれを取扱つた。ところがロベスピエルは人民を以て、責任もあれば、理解もあり、又德性もある者と信じて居たのみならず、凡ゆる理解も、凡ゆる德性も、人民の間に存在して居ると陳述した……かかる誠實と、彼の絕對的正直と、彼の嚴格とは、彼をして人民の眼に The incorruptible と映ぜしめた」と曰て居る。要するに、ルソーの著書に依て敎育せられたロベスピエルの理想とするところは、一種の新社會を作り、其の人民は何れも平等であつて、皆應分の勞働を爲し、淸廉と勤儉を旨とする事であつ

た。一言にして云へば、彼は、凡ゆる政治の目的は『德義の時代』(Reign of Virtue)を現出せしむる事に在らねばならぬと確信して居たのである。此の如き信念を抱いて居た彼は過誤、失策を以て畢竟不德にして心術の正しからざるが故であると解し、而して彼が此の政治的眞理の區劃を立つるや、極めて峻嚴であつて、苟くも此の區劃から逸脫した者は、人民の敵として、これを糺彈することを憚らなかつた。此の如くして、ジロンド黨も、ダントンも、エベールも芟除せられたのである。

ロベスピエルが奈何に正直であつても、矢張り時代の子たるを免れなかつた。當時の多くの政治家と均しく、彼亦時々主義を變更した。八月十日迄王政論者であつた彼は、九月二日以後既に共和主義者と豹變して居た。彼は此點に於て、人民を指導するどころではなく、却て、人民に率ひられたのである。彼が今日吾人の眼に僞善家的煽動政治家と映ずる所以である。然もロベスピエルは其の滿々たる野心を遂行す可き膽氣に於ては、到底ダントンの敵ではなかつた。吾人は彼の性格に於て、哲學的熱情と卑陋なる陰謀の不思議なる融化を見るのである。彼が他を陷るる術策の隱險酷烈を極めて、併かも突差の間に其の術策を行つたのは、畢竟彼が正々堂々敵と對抗する膽勇に缺くる所かあつた故でなくてはならぬ。（註六）ダントンの豪快濶達で無頓着であつたに反して、ロベスピエルが細心で深慮があつた反面には、睚眦の怨も必ず報復せねば已まないと云ふ執念と怨惡の性質を具へて居たのである。彼がマラーと共に、ジロンド黨に對して終天の怨を構るに至つたのは、畢竟同黨の人々かロベスピエルの屢々神及び天命を口にするを冷嘲したことを忘れなかつた爲である。

七

エベールの共產主義的新社會說は、飢餓に瀕した巴里のサン・キュロットは勿論、全佛國の貧民に欽仰せられた。ロベスピエルのスパルタ的國家觀は多少これと彷彿たるものがあつたけれど、然も彼は之を擇ばなかつた。ところが、エベールの基督敎廢止の暴擧に至つては、曾だに大多數の佛國人を恐怖せしめたばかりでなく、痛く、彼自身の新宗敎を以て佛國人を支配せんことを理想として居たロベスピエルを惱らしめた。彼はルソーの敎を奉じて、天地を主宰する造物主の存在(基督敎のゴッドではない)を信じ、ヴォルテールの語を藉りて、神が若し存在しないならば

之を設くるの要がある」と主張したのである。彼はエベールの無神論も、共産主義も、兩つながら擇ばなかつたが、ダントンの穩和主義も亦排斥したのである。王政顚覆の張本人であり、恐嚇政治初期の代表者であるダントンは、表面激烈な議論を唱へたけれど、ミラボーと均しく內實にては調和的材幹を抱いた實際的政治家であつた。彼は恐嚇政治が既に外敵を擊退し、內亂を鎭壓した以上、何時迄もギヨッチイネを働かする必要のない事を主張した。これが頓て、彼の人望を殞し、彼の自滅を招いた所以であつた。ロベスピエルは內心穩和政策に贊成しないのではなかつたが、彼は一身上の政略からこれに反對したのである。明敏なる彼は、既に恐嚇に飽きたる佛國人は今に於て少しく自由を與るならば、奈何なる政府でも歡迎す可きことを覺つて居たのである。然れども、彼は恁かる國民の歡迎をば自家の上に受けて、之を利用しやうと希つて居た。即ち彼の抱負とする自然神敎に基づく政敎政治の實施に這般の寬仁政策を利用しやうと欲したのである。

かくて、ロベスピエルは先づエベールを倒さんが爲、一旦退隱したダントンを田舍から再起して、其力を借りてエベール一派を仆滅した。次に彼はダントン及び其の一派に「王政を再興して、國會及び佛蘭西共和政治を破壞す可き傾向ある陰謀」を企畫したと云ふ寃罪を負はせて悉く刑殺した。既に敵黨を悉皆芟夷したるロベスピエルは佛國の政權を一手に握つて、思ふ儘に獨裁政治を實行し得る最得意の地位に立つたのである。即ち自然神敎を基礎として彼の理想の『德義時代』を出現せしむ可く着々實行に着手した時に、反ロベスピエル熱が猛然と捲起されて、遂に彼の沒落を來したのである。

此の如くして、さしも當時の全歐羅巴を震慴せしめたのみならず、今日尙ほ佛國革命と共に無信仰、無秩序、兇暴、殘忍、殺戮、掠奪等あらゆる不穩文字を聯想せしめ、佛國革命を以て守舊黨及革命派が呪詛の目的たらしめた恐嚇政治は、其の最も熱心なる主唱者ロベスピエルの沒落と共に終極を告げたのである。

八

公安委員會が恐嚇政治を以て人民に臨んだのは、主として內外の危急に際して國家の統一を保たんが爲であつたことは、既に說けるが如くであるが、此の機會に乘じて、或は平生の私怨に報ひ、或は他の財物を掠奪せんとの醜劣なる動機に出で

た點も少なくなかつた。或革命史家は、恐嚇政治を以て三千人に足らざる巴里の一腐敗團體の所業であると評した程である。佛國が恁かる大危機に際して、克く外敵を敗ることを得たのは、重もに恐嚇政治の賜であるけれど、其實は公安委員一派の功績と曰はんよりは、寧ろカーノの軍制改革の功與つて多きに居ると云つた方が當つて居る(註、七)。佛國の勝利は恐嚇政治を行はずしては或は獲られなかつたかも知れないが、佛國人の多數が恐嚇政治家たるよりは、より多く愛國者であつたが故に、彼の如き勝利は獲られたのである。當時内に在りて戰々兢々たりし佛國人が、此の恐怖の境涯から脱却することを得べき唯一の方法は、速かに進んで國境の外敵と戰ふことであつた。一度外征軍に身を投ぜんか、其處にはジャコベンもなく、『愛國者』もなく、『貴族』もなく、凡て佛蘭西人たることを得たのである。此の一致協力が即ち佛國の勝利を齎らした所以である。

恐嚇政治が佛國人民愛國心の刺激劑となつたこと云ふ迄もないが、此の如くして發揚せられた愛國心の效果は、各方面に於ける佛國革命軍の勝利となつた。恐嚇政治の目的は即ち茲に達成せられたのであるから、假令一時的方便にもせよ、佛國人民の自由と權利とを蹂躪して顧みざるが如き制度の急遽廢止せらる可きは、固より當然の事である。夫の如き全勢力を揮つたロベスピエルが恰も枯木の倒るるが如くに沒落したのは、彼が怪しき宗教を佛國人に强制せんとした事よりも、又は彼の凡ゆる敵黨が各自一身上の危險を思ふて提撃せんとした事よりも、一七九四年の後半に入りて佛軍が各戰線に勝利を獲、殊に同年七月に於けるフロイラスの大勝は、佛國人をして最早祖國安泰なりとの念を懷かしめし事が其の大原因である。是等の捷報はロベスピエルの地位を固めずして、却て之を顚覆したのである。何となれば、佛國の間に今は恐嚇政治の必要を認めずとの信念高まれるを見て、ロベスピエル反對の各派は巧に此の機會を捉へて、彼を排斥するに至つたからである。要するに、恐嚇政治の目的は愛國心の發揚に依て達成せられたから、佛國革命軍の勝利と共に、其の恐嚇政治の權化たるロベスピエルの存在の理由は茲に失はれたと云ひ得るのである。

（註、一）一七八九年の革命をば、一八三〇年の『七月革命』及び一八四八年の『二月革命』と區別するか爲『大革命』と呼ふが適當であるけれど、以下便宜上單に佛國革命と稱する。

（註、二）公安委員會にては、ラ・フアイエット及びデュムリエーの敵に投降せしに鑑

み、代議士の中から、一軍に二人宛の軍事視察委員を派遣して、此の如き事なきを期すると共に、側ら新募兵の愛國心を激厲せしめた。内亂鎭撫の爲にも、亦代議士は特派せられ、後には各州に派遣せられて、知事の如く地方政務にも執掌するに至つたのである。

（註三）　サン・キュロット(Sans culotte)とは breeches-less patriot 即ち『半洋袴なき愛國者』の義である。革命前には貴族は概して『膝までの洋袴』を用ひたのであるが、革命勃發後、革命黨は從來勞働者に限て用ひられし長洋袴を穿ちて民主的精神を示した。即ち短洋袴を廢して、長洋袴を用ひることは、自から革命に味方する愛國者の表徵と認めらるるに至つたのである。

（註四）　Madelin: The French Revolution p. 356

（註五）　カーライルがシヤルロット・コルデーのマラー暗殺事件を評して「此の如き方法に於て、最美の者と最醜の者とは衝突して、互に相滅ぼした」と曰へるは、文章として對照の妙はあるかも知れないが、佛國革命の大主義大目的から觀察すれば、必ずしも肯綮に中つて居る評言とは思はれない。(Carlyle: French, Revolution Terror. Chap. I)

（註六）　クートンとサン・ジュストとはロベスピエルの兩腕とも稱す可き幕僚であつた。前者は身體不具であつたけれど、其の識見儕輩を拔き、後者は信念の堅固と裁斷の敏活とに於て、却てロベスピエルに勝つて居た。ロベスピエルが結局佛國の政權を掌握したのは、是等兩人が内から彼を助けた爲てあつたと云つても可い。

（註七）　カーノも公安委員の一人であつたけれど、彼は政治家と云はんよりは寧ろ行政家であつた。彼が佛國の軍制に加へた大改革は、佛軍をして夫の如き大勝利を獲せしめた。後年ナポレオンをして歐羅巴を征服せしめたるは、カーノの此の軍制の功が與つて多きに居るのである。（完）

歴史と歴史家

瀧本誠一

歴史(History)は言葉通りに之を解釋すれば making another to know a thing as perfectly as you know it yourself を意味するのであつて、歴史家は faithful witness of the truth を意味するのである(W. J. McCullagh's lectures on History. p. 6o.)然れども是れは單に History なる言葉の起原を示しただけのことであつて、近世に於ては此の言葉はコンな漠然たる意味でなく、モット有意義に使用せらるることとなつたのである。

言葉の意味の變遷を辿つて、其の由來を詳かにせんとすれば、其事それ自體が史學の發達史を叙述する樣になつて、中々一朝一夕に出來る仕事にあらざれば、コハ姑らく別問題となし、近世學界に於て、一般に概括的に、歴史と云ふことは、宛も現在生きて居る人物の傳記と同じく、生命を有する社會の傳記として認めらるるものの如し、W. P. Johnston 氏は米國歴史協會雜誌(一八九三年四七頁)に掲げたる論文に